慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	付録 : シンポジウム配付レジュメ
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2011
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011.) ,p.283- 295
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2 : 事典がひらく新たな世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0283

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2011年３月10日
慶應義塾福沢研究センター

『慶應義塾事典』

－「調べる」と「読む」の両立－

関西学院大学
井上琢智

【Ⅰ】背景

1) 創立記念事業の一貫としての出版

[例１] 関西学院

『関西学院100年』（写真集）→『関西学院百年史』（全４巻：正史）→『関西学院事典』（111周年）→『関西学院事典』(増補改訂版：125周年：企画中)

[例２] 慶應義塾（＝大学史＋福澤諭吉研究）

『慶應義塾百年史』（全５巻：正史）→『慶應義塾年表』(125周年)
→『慶應義塾事典』(150周年)＋『写真集　慶応義塾150年』
『福沢諭吉全集』・『続福沢全集』・『福沢諭吉書簡集』・『福沢諭吉著作集』
→『福澤諭吉事典』(150周年)

2) 自己点検・評価システムの導入と建学の精神の明示化の必要性

1991：大学設置基準改正（大綱化）→2003：学校教育法における「自己点検・評価」の義務化

3) 「自校教育」の高まり

[例] 井上琢智「＜自校史教育を考える＞いかにして大学の『建学の精神』を伝えるか－「『関学』学」の位置づけと意義－」『日本大学史紀要』（第11号:2009）

【Ⅱ】『慶応義塾事典』（略『義塾』）『福澤諭吉事典』（略『福澤』）の刊行の意図等

1) 『慶應義塾150年史資料集』の一貫

「通史の150年史を望む声」→①100年以降の資料の収集・整理の不十分さ→②歴史書としての価値ある通史の記述困難さ→③果たして義塾に「正史」が必要かどうか：「むしろ義塾史についても『多事争論』（『文明論之概略』：『義塾』『福澤』730＜索引なし＞）がふさわしい」→『義塾』『福澤』

2) 「自我作古（われよりいにしえをなす）」の精神

→『義塾』415（索引あり）、『福澤』760（索引なし）

3) 「『調べる』ということと、通して『読む』という二つの面･･･のバランス･･･に腐心」（「新たな発見に満ちた『福澤諭吉事典』」『三田評論』「特集　福澤諭吉生誕175年」、No.1140,2010.12, p.11：略『評論』）

cf. 『福澤』の場合：Ⅰ｜生涯　→「福沢諭吉の歩み」（略年表）→　Ⅸ｜年譜

【ｺﾒﾝﾄ】「年譜」の位置（略年譜があるもの、近い方が利用しやすい？）

4) 想定する読者

「高校生も読めて、しかも専門家の方にも満足してもらえるもの」（『評論』p.12）

5) 『事典』・執筆者の特徴

『義塾』：「慶應義塾の骨格･･･ハード面に比重」（『評論』p.12）
「それぞれの部署の方･･･執筆者が多かった」（『評論』p.11）
『福澤』：「諭吉という極めて多面性を持った人物にあらゆる角度から光を当てて、改めて福澤の人物像を浮き彫り･･･ソフト面の重視」（『評論』p.12）
「ある程度執筆者絞つてやってきた」（『評論』p.11）
『義塾』『福澤』：「記名入り」

【Ⅲ】人名索引に見る『義塾』と『福澤』：共通人物（「あ」のみ事例）

1) 双方に項目あり (異なる生没年表記)：筆者の相違と評価視点の相違：多面的な評価
朝吹英二 (600 [平野隆]：431 [飯野泰三]：写真は同じ)
『義塾』：「実業家」
『福澤』：「実業家」
阿部泰蔵 (602 [松崎欣一]：433 [米山光儀]：異なる写真)
『義塾』：「日本最初の生命保険会社明治生命の創業者」
『福澤』：「教育者、実業家」

2) 『義塾』に項目あり：足立寛（601＜「藤三郎」の追記：『福澤』にはなし＞）

3) 『福澤』に項目あり：「あ」にはなし

2) 双方に項目なし：
朝倉文夫、麻布超海、朝吹澄（『福澤』には旧姓「中上川」との追記）、阿部三圭

【Ⅳ】「調べる」の試み・「調べた成果」

1) 「慶應義塾大学」は①何時、②なぜ　Keio - gjjuku University でなく、Keio Universirty　と書かれるようになったか？　「義塾」という名称の重要性を軽視？
cf. 「組織名英語表記」にも明記されず。

2) 「理事会」(817：索引：76,86,129＜項目なし＞)・「大学評議会」(817：索引：76,**84**)
視点：理事会構成員の問題　→　構成員の変遷　→　同窓の人数

3) 「ペンマーク」（→「さまざまなペンマーク」872）「エンブラム」
商標登録・VIガイドライン→具体的に明示されず：機密保持のため？

4) 「学期の変更」（9月入学→4月入学）「セメスター制の導入」
どのように調べるか？

5) 福澤家の系譜図　→『福澤』(424-27)

6) 「歴代役職者一覧」
言及すらなし：①福沢武（現役評議員会議長）
項目説明なし：①鳥居泰彦、②安西裕一郎（言及あり）

7) 尹致昊 (39：朝鮮留学生)
cf. 木下隆男「関西学院と『尹致昊日記』」『関西学院史紀要』第7号 (2001)

8) 範多竜平 (510：ゴルフ部)　E.H.ハンターの長男範多竜太郎の長男
cf. 井上琢智「大阪鉄工所とハンター家」『大阪春秋』第53号 (1988)

【Ⅴ】『義塾』の新たな試み

1) 生徒・学生の利用の簡便さ

→　「自校史」教育での利用　→慶應義塾大学の開講科目？

→湘南藤沢中・高等部の「総合学習」（『評論』p.37）

→　ＣＤＲなどデータ・ベース化・ホームページでの公開

→　『義塾』と『福澤』の相互検索システムの構築

2) 索引：どの程度の項目を拾うべきか　解決策：ＣＤＲなどデータ・ベース化

①事項索引

ｱ)「自我作古（われよりいにしえをなす）」

『義塾』項目あり・索引あり：

『福澤』項目あり・索引なし（「ことば一覧」にあり）

ｲ)「協同勉励」（「慶応義塾之記」『義塾』12：索引なし）

②人物索引

ｱ) 引用回数少ないが、項目あり

[例] 1回：河口真一、渡部一郎

ｲ) 引用回数多いが、項目なし　→　社会的影響力の大きさを示す

[例] 5回：福澤大四郎

6回：伊藤博文、岩崎弥太郎、尾崎行雄、戸川秋骨、与謝野鉄幹

8回：吉田茂、大隈重信

3) 項目選択の基準とりわけ「社中の人びと」の選択基準

cf.　①『関西大学を築いた人々』(HP)　『関西大学百年史』（上・下・人物史編）

②『タイムトラベル 中大 125： 1885→2010』(2010,2011)

③「シリーズ　関西学院の人びと」『関西学院史紀要』（年1回発行:現在21名）

4) 参考文献の追加：膨大な福澤・慶応義塾研究の成果の示唆

①「実学」(416)：永田守男『福澤諭吉の「サイアンス」』慶応義塾大学出版、2003

②藤原昭夫『フランシス・ウェーランドの社会経済思想』：

「ウェーランド経済書講義」（池田幸弘）になく「ウェーランド」（池田幸弘）にあり

5)『義塾』における現状データの更新の問題（「付録　慶應義塾史資料」）

①土地・建物変遷図

②組織図

[注記] 組織名英語表記「定まった英語表記のない組織を省いた」（通常は規程集で決められているのではないか）

③卒業生

6)「むしろ義塾史についても『多事争論』（『文明論之概略』：『義塾』『福澤』730＜索引なし＞）がふさわしい」

①これまでなぜ書かれた正史の位置づけ＜悪くすると否定に繋がる？＞

②今後の正史を書く理由の否定？

③「正史を書くこと」は必ずしも「多事争論」を妨げない。むしろ「正史」があることで、「多事争論」を引き起こすことができる。

【参考1】関西学院における「日本の近代化と関西学院」（総合コース）

年度	副題	講師数	受講生
1995	日本の近代化とともにあゆむ関西学院の姿とその存在意義	6	297
1996	特に北米社会との関連で	4	314
1997	関西学院100年史を読む	8	136
1998	関西学院100年史を読む	11	349
1999	巣立った人びと	7	606
2000	学問の系譜	12	203
2001	関西学院111周年に学ぶ	8	297
2002	関西学院111周年に学ぶ	6	222
2003	学院の歴史に学ぶ	6	221
2004	関西学院学部史からみる日本近現代社会との関わり	11	570
2005	私学『関西学院大学』“輝く自由” Mastery for Service からの個性	6	593
2006	現代日本社会における関西学院	6	505
2007	関西学院同窓の社会貢献	8	612
2008	関西学院120年の歴史に学び、将来を展望する	6	632
2009	“Mastery for Service”の源流と展開	7	554
2010	大学における各学部の伝統と特色	14	577

【参考2】『関西学院事典』紹介記事

『朝日新聞』2001年10月19日夕刊

「**その名も『関学事典』**

関西院大などを運営する学校法人関西学院（兵庫県西宮市）が、学院の歴史やゆかりの人物などを紹介した『関西学院事典』を発行、20日から全国の書店で販売する。昨年創立111周年記念事業の一環で、２年間かけて編集した。歴代学院長や著名な卒業生、アメリカンフットボール部、関西学院グリークラブといった学生団体、時計台をはじめとする学内の建物なし、505項目を解説している。Ａ５判で444ページ、５千円」

『読売新聞』2001年11月14日朝刊（抜粋）

「**関西学院　事典を刊行**　関西学院（西宮市）は創立111周年記念事業として、学院に関することがらや人物などを50音順にまとめた『関西学院事典』を刊行した。学院が1998年に完結した『関西学院百年史』（全４巻）を補完するとともに、手軽に学院のことを知ってもらうのが狙い。・・・・・収録人物は百四十名・・・・」

２０１１年3月１０日
於　慶應義塾大学

『日本女子大学学園事典―創立100年の軌跡』の紹介　及び
『慶應義塾史事典』と『福澤諭吉事典』の感想

１．はじめに
２．『日本女子大学学園事典―創立100年の軌跡』の紹介
　① 事典出版のいきさつ
　② 事典の概略
　　体裁　　編集・発行　日本女子大学
　　制作　ドメス出版
　　４１８頁　A４版、横組み　２段
　　出版年　２００１年１２月１日

　　目次　　あいさつ　　頁ｉ　―ｖｉ　　[後藤祥子・宮本美沙子・青木生子]
　　執筆者協力者一覧　頁viii　―ｉｘ　　[２７６名]
　　日本女子大学の１００年〈通史〉　頁１―４４　　[中嶌邦]
　　日本女子大学学園事典　　頁４６―３４２　　[項目別（含む人名）、　８６７項目
　　このうち人名は２７９]
　　付表　　頁３４４―３９３
　　索引（人名項目・事項項目）　頁３９６―４１４
　　編集後記　　頁４１６―４１７
　　創立百年史編纂委員会名簿　　頁４１８
　③ 編纂組織　　④　進行状況　　⑤　苦心したことなど

３．慶應義塾大学と日本女子大学
　・福澤諭吉と成瀬仁蔵
　・日本女子大学を助けた慶應義塾出身者及び関係者

４．『慶應義塾史事典』と『福澤諭吉事典』の感想

（報告者　秋山倶子）

『万国政表』後の日本における統計学の展開

慶應義塾福沢研究センターシンポジウム資料

2011年3月10日

慶應義塾大学経済学部　宮内環

1　『福沢事典』『義塾史事典』における『万国政表』とその後

1.1　「人名索引」より

緒方洪庵（おがた こうあん）(1810-1863)
岡見彦三（おかみ ひこぞう）(1819-1862)
杉亨二（すぎ こうじ）(1828-1917)
福沢諭吉（ふくざわ ゆきち）(1835-1901)
岡本節蔵（周吉、古川正雄）（おかもと せつぞう（しゅうきち、ふるかわ まさお））(1837-1877)
高木兼寛（たかぎ かねひろ）(1849-1920)
北里柴三郎（きたさと しばさぶろう）(1853-1931)
森鴎外（林太郎）（もり おうがい（りんたろう））(1862-1922)

1.1.1　『福沢事典』『義塾史事典』における記述

- 緒方洪庵（おがた こうあん）(1810-1863)

緒方洪庵　「瓦町に蘭学塾「適々斎塾（適塾）」を開く。（中略）福沢諭吉は安政二(一八五五)年三月九日に適塾に入門」（『福沢事典』pp.461-462）、**医学部**「福沢諭吉は、蘭方医緒方洪庵の適塾で学んだこともあり、財政上許されるのであれば理科系の専門教育を慶応義塾で行ないたいとの希望を抱いていた」（『義塾史事典』p.216）、**医学所**「福沢諭吉は蘭方医緒方洪庵の適塾で蘭学を学んだこともあり、早くから西洋医学に関心を寄せていた」（『義塾史事典』p.219）

岡田摂蔵　「慶応義塾長。（中略）安政六（一八五九）年緒方洪庵の適々斎塾（適塾）に入門」（『義塾史事典』p.631）

福沢諭吉　「長崎遊学を経て安政二（一八五五）年に大阪の緒方洪庵に入門し、主に自然科学書を教材に蘭学を習得した」（『義塾史事典』p.735）

- 岡見彦三（おかみ ひこぞう）(1819-1862)

岡見彦三　「福沢諭吉に蘭学塾を開かせた人物」（『福沢事典』p.462）

岡見彦三　「福沢諭吉を江戸に呼び蘭学塾を開かせた中津藩士」（『義塾史事典』p.631）
※その他『義塾史事典』pp.3-4,p.681に記述あり。[1]

- 杉亨二（すぎ こうじ）(1828-1917)

杉亨二　「官僚、統計学者、日本近代統計の祖。（中略）嘉永二（一八四九）年適塾に入門するが病気のため同年帰国。（中略）同六年には勝海舟と知り合ってその私塾長となり、老中阿部正弘にも仕えた。（中略）万延元（一八六〇）年に蕃書調所教授手伝となるが、外国方通弁の同僚に福沢諭吉がいた。（中略）維新後は静岡藩に仕え、明治二（一八六九）年現沼津市原の人口調査を試みる。（中略）九年には表記学社（のちスタチスチック社）を創設する。（中略）一二年、福沢が会長を務めた頃に東京学士会院の会員となっている。この年、杉は政表課職員を率い山梨県

[1] 本文中の「※」印は報告者注を表す。

で、日本における国勢調査の先駆となる、個別世帯票による「甲斐国現在人別調」を実施した。（中略）一六年東京九段に共立統計学校を開校し、みずから教授長として統計専門家や学者の養成に力を注いだ」（『福沢事典』p.515）

開塾　「のちに統計学者として有名になる杉亨二が中津藩に招かれ、中屋敷において希望する藩士に蘭学教授を行なっていた」（『義塾史事典』p.3）、**岡見彦三**「六年のペリー来航を受け藩邸に蘭学教師を招聘する許可を得て、杉亨二、次いで松木弘安（寺島宗則）を招き」（『義塾史事典』p.631）、**適塾の同窓生**「福沢入門以前に適塾に学んだ先輩には、（中略）日本の統計学の祖と称される杉亨二」（『福沢事典』p.43）、**江戸出府**「中津藩はすでに西洋砲術採用の必要性を痛感し、蘭学者として高名な松代藩士佐久間象山のもとに多くの藩士を送り込む一方で、他藩から杉亨二や松木弘安を招いて蘭学教授を行わせていた」（『福沢事典』pp.55-56）

明六社　「森と西村の二人が「老学士」「都市の名家」として呼びかけたのは中村正直（敬宇）、福沢諭吉、津田真道、加藤弘之、西周、箕作秋坪、杉亨二、福羽美静、杉浦弘蔵（畠山義成）、箕作麟祥の一〇名である」（『福沢事典』p.122）

東京学士会院会長就任と退会　「この間の一二月一八日、福沢は田中に宛てた書簡において、学士会院はできるだけメンバーを少なくし、（中略）杉田玄端、エドワード・モース、小幡篤次郎、杉亨二などの名前を挙げている」（『福沢事典』p.205）

岡見彦三　「六年には江戸藩邸に蘭学教師を招聘する許可を得て、適塾出身の杉亨二、薩摩藩出身の蘭学者松木弘安（のちの寺島宗則）を招いて中屋敷内で藩の子弟の指導に当たらせた」（『福沢事典』p.462）

勝海舟　「嘉永三（一八五〇）年赤坂田町に杉亨二を塾長として蘭学塾を開く」（『福沢事典』p.476）

呉文聡　「工部省勤務を経て、八年に正院・政表課に入り、杉亨二の指導のもとで統計学の学習と実務に従事する」（『福沢事典』p.494）

寺島宗則（松木弘安）　「政治家、外交官。（中略）杉亨二らと並んで鉄砲洲の中津藩邸で蘭学塾の教授を務めたこともある」（『福沢事典』p.535）

- 福沢諭吉（ふくざわ ゆきち）(1835-1901)

福沢諭吉　（『義塾史事典』pp.734-736）

数理と独立　「慶応義塾の教育方針として『福翁自伝』（王政維新）で福沢諭吉が述べたことば」（『福沢事典』p.99）

- 岡本節蔵（周吉、古川正雄）（おかもと せつぞう（しゅうきち、ふるかわ まさお））(1837-1877)

岡本節蔵（古川正雄）　「慶応義塾初期の塾長。（中略）安政三（一八五六）年八月に大阪の適塾に入った。（中略）福沢が咸臨丸で渡米したときには、翻訳途中の世界各国の地理統計一覧表『万国政表』の完成を委ねられ、万延元（一八六〇）年冬、「福沢子囲閲　岡本約博卿訳」として刊行した」（『福沢事典』p.464）

岡本周吉（古川正雄）　「慶応義塾長。（中略）福沢の最初の渡米時に、翻訳途中の『万国政表』完成を委ねられた」（『義塾史事典』pp.632-633）

万国政表　「翻訳は初め福沢諭吉が手掛けたが、訳業半ばで木村摂津守に随行して渡米することとなり、岡本節蔵（周吉、のちの古川正雄）に完成を託し、福沢帰国後の万延元（一八六〇）年冬に福沢閲、岡本訳として出版された」（『福沢事典』p.87）

大槻磐渓　「儒者、砲術家。（中略）福沢が校閲した、古川正雄『万国政表』に寄せた磐渓の序文」（『福沢事典』p.460）、**適塾の同窓生**「福沢が同窓生として挙げている名に、石渡寛輔、鈴木儀六、手塚良庵（良仙）、田中発太郎（信吾）、鶴田仙庵、中邨恭安、沼田芸平、平山良斎、三刀元寛、山田謙輔、岡本周吉（古川正雄）、原田磊蔵がいる」（『福沢事典』p.43）

江戸出府　「福沢は一度中津に帰り、母に暇乞いをし、そのうえで江戸に向かった。藩から家来一人分の旅費も出ていたので、家来としての同行を望んだ適塾の岡本周吉（古川節蔵）と、もう一人江戸行きの同行を申し出た原田磊蔵と三人で東海道を下った」（『福沢事典』p.56）

岡田摂蔵　「元治元（一八六四）年頃、海軍に出仕した岡本周吉（のちの古川正雄）の後を引き継いで塾長となる」（『義塾史事典』p.631）

戊辰戦争関係者救済運動　（『福沢事典』p.84）
※ほかに『義塾史事典』p.4 に記述あり。

- 高木兼寛（たかぎ かねひろ）(1849-1920)

博士会議（はかせかいぎ）　「政治と学問の関係を論じて政府による「大博士」の選定に反対した、明治二一（一八八八）年五月一七日付『時事新報』社説。同年五月七日、前年に制定された学位令によって、（中略）高木兼寛（医学）などの人びとに博士の学位が授与された」（『福沢事典』p.310）
※高木兼寛が海軍総監として当時の脚気対策として着手した海軍の兵食改革は、明治 17 年 (1884 年) の蛋白質を重視した洋食採用、さらに明治 18 年 (1885 年) の麦飯主食であった。

松山棟庵　「医学者、慶応義塾医学所校長、医療事業の開拓者。（中略）一四年五月高木兼寛らと成医会を創設し、附属の有志共立東京病院（のちの慈恵会医科大学、慈恵病院）を開設した」（『福沢事典』p.578）

松山棟庵　「十四年にはイギリス留学から戻った高木兼寛と共に成医会という新たな学会を設立」（『義塾史事典』p.756）

医学所　「財政的な困難もあり、一三年閉鎖のやむなきに至った。（中略）その後松山は医学所関係者や英国で医学を学んだ高木兼寛と十四年に成医会を設立、東京慈恵会医科大学の源流にもなった」（『義塾史事典』p.220）

- 北里柴三郎（きたさと しばさぶろう）(1853-1931)

北里柴三郎　「医師、細菌学者。（中略）明治八（一八七五）年上京して東京医学校（一〇年東京大学医学部と改称）に学び、一六年卒業。内務省衛生局に入り、一八年ドイツに留学。ベルリン大学のコッホ (Robert Koch) の教室で細菌学を学び、破傷風病原菌の純培養に成功し、免疫血清療法を発見した。（中略）福沢らの援助で、一一月伝染病研究所を創設。次いで二六年九月結核患者の専門病院である土筆ヶ丘養生園を、麻布広尾の福沢の所有地に設立した。（中略）六年慶応義塾大学部医学科創立の中心として活躍、初代医学科長（のちの大学医学部長）に就任する」（『福沢事典』pp.485-486）

相馬事件　（『福沢事典』p.174）

義和宮の教育監督　（『福沢事典』p.237）

伝染病研究所・土筆ヶ岡養生園　「明治二五（一八九二）年ドイツから帰国した北里柴三郎の不遇を嘆いた長与専斎から相談を受けた福沢諭吉は、いずれ子どもたちのためにと用意していた芝公園の借地に、森村市左衛門の協力を得て、同年一二月に伝染病研究所を設立した。（中略）長与、福沢らが相談して、今日北里研究所附属病院がある白金の福沢所有の地所に土筆ヶ岡養生園を設立することになった」（『福沢事典』pp.314-315）

養生園ミルク事件　(『福沢事典』p.317)

発病と療養　「明治三一（一八九八）年九月二六日午前一時頃、（中略）家人に呼ばれた主治医の松山棟庵、続けて北里柴三郎が推薦した脳神経専門の山根文策養生院副院長が到着し、六時頃診察したところ、意識はなく手足の先が冷え、右半身も麻痺している状態」(『福沢事典』pp.334-335)

洋食　(『福沢事典』pp.371-372)

落語と講談　(『福沢事典』p.383)

子どもの病気　(『福沢事典』p.404)

福沢家を支えた人びと　(『福沢事典』p.412)

金杉大五郎　(『福沢事典』p.481)

高橋岩路　(『福沢事典』p.524)

田端重晟　(『福沢事典』p.531)

長与専斎　「医者、官僚、政治家。（中略）二五年宮中顧問官。同年、ドイツより帰国後不遇の北里柴三郎を福沢に紹介、支援のきっかけを与えた」(『福沢事典』p.547)

森村市太郎（市左衛門）・森村豊　「森村組の創設者。（中略）福沢と共に私財を投じ北里柴三郎の伝性病研究所や土筆ヶ丘養生園の設立を可能にした」(『福沢事典』p.590)

- 森鴎外（林太郎）（もり おうがい（りんたろう））(1862-1922)

文学科（大学部）　「四三年四月から文学科は文学・哲学・史学の三専攻に分かれ、森鴎外・上田敏が文学科顧問となり（中略）講義には（中略）審美学（二五年一〇月から森鴎外担当）などが並び」(『義塾史事典』p.173)

三田文学　「義塾は森鴎外、上田敏に文学科顧問を委嘱し、二人の斡旋で荷風が編集主幹となる『三田文学』（月刊）が四三年五月に創刊された」(『義塾史事典』p.176)

小山内薫　「東京帝国大学文学部英文科在学中、森鴎外に文才を認められ文筆と演劇の世界に入る」(『義塾史事典』p.637)

久保田万太郎　「大学部文学科は機構を改革し、森鴎外、上田敏を顧問に、永井荷風を事実上の主任教授に招き、『三田文学』を創刊した。翌年の同誌六月号に文学科在学中の久保田は小説「朝顔」を発表」(『義塾史事典』p.657)

永井荷風　「小説家、随筆家、劇作家、慶応義塾大学部文学科教授。（中略）四三年、慶応義塾より大学部文学科刷新のため、森鴎外、上田敏の推薦で文学科教授、および『三田文学』編集主任として招聘される」(『義塾史事典』p.704)

※『福沢事典』索引には「森鴎外（林太郎）」は見出せない。

1.2　「事項索引」より

『万国政表』（ばんこくせいひょう）（岡本周吉訳） 表記学社（スタチスチック社） 共立統計学校 統計学	1

1.2.1 『福沢事典』『義塾史事典』における記述

- 『万国政表』（ばんこくせいひょう）（岡本周吉訳）

万国政表 「日本における西洋の統計書のもっとも古い翻訳。一八五四年刊行の原著の表題は、直訳すれば「国名、地積、政体、首長、その地を含む、地球上の全土に関する統計表」の意」（『福沢事典』p.86）※当資料 1.1.1 の「岡本節蔵」の項目を参照せよ。

命名 （『福沢事典』p.12）

署名 （『福沢事典』p.390）

大槻磐渓 （『福沢事典』p.460）※当資料 1.1.1 の「岡本節蔵」の項目を参照せよ。

岡本節蔵 （『福沢事典』p.464）※当資料 1.1.1 の「岡本節蔵」の項目を参照せよ。

- 表記学社（スタチスチック社）

杉亨二 「九年 (1876 年) には表記学社（のちスタチスチック社）を創設する」（『福沢事典』p.515）※引用文中の西暦年は報告者が追加。※「表記学社」はその後明治 11 年 (1878 年) に「スタチスチック社」と改名し、明治 19 年 (1886 年)『スタチスチック雑誌』創刊。さらに明治 25 年 (1892 年)「統計学社」に改名。
参考文献：日本統計協会ホームページ (http://www.jstat.or.jp/information/sugi/index.html) (2011 年 3 月 9 日参照)

- 共立統計学校

杉亨二 （『福沢事典』p.515）※当資料 1.1.1 の「杉亨二」の項目を参照せよ。

- 統計学

適塾の同窓生 （『福沢事典』p.43）※当資料 1.1.1 の「杉亨二」の項目を参照せよ。

万国政表 （『福沢事典』p.86-87）※当資料 1.1.1 の「岡本節蔵」の項目を参照せよ。

呉文聡 （『福沢事典』p.493-494）※当資料 1.1.1 の「杉亨二」の項目を参照せよ。

杉亨二 （『福沢事典』p.515）※当資料 1.1.1 の「杉亨二」の項目を参照せよ。

2 『義塾史事典』『福沢事典』に見当たらない記述

2.1 統計関連の事項

製表社 （杉亨二は）「明治 11 年 12 月小幡篤次郎ら 15 名と「製表社」を創設し、渡辺洪基らと合流して「統計協会」（明治 14 年「東京統計協会」と改名）を設立」

「駿河国人別調」家別票（「世帯票」）を用いた人口調査。

※上記二項目の**参考文献**:日本統計協会ホームページ (http://www.jstat.or.jp/information/sugi/index.html) (2011 年 3 月 9 日参照)

2.2 「統計学」という訳語

- 明治 7 年 (1874 年) 箕作麟祥 (1846-1897) の翻訳書『統計学　国勢略論』（原著：Moreen de Jonné (1856) *Elements de Statistique*, 2. ed.）が最初か？

- 明治 19 年 (1886 年) 『スタチスチック雑誌』1 号に杉亨二が「「スタチスチック」ノ話」を掲載し、「統計」という訳語に反対意見を述べている。
  参考文献：日本統計協会創立 100 周年記念事業計画委員会編『明治・大正期スタチスチック雑誌統計学雑誌論文選集』日本統計協会、1979 年

2.3　森林太郎（鴎外）(1862-1922) について

スタチスチック社今井武夫との論争は、
・「スタチスチック」に「統計学」の訳語を与えるべきか？
・ 統計学は因果を明らかにする科学か、あるいは相関を示す理法か？
をめぐる問題についてであった。

森林太郎 の著述は
・「医学統計論ノ題言」『東京医事新誌』569、1889（明治 22）年 2 月 23 日
・「統計ニ就テ」『東京医事新誌』573、1889（明治 22）年 3 月 23 日
・「統計ニ就テノ分疏」『東京医事新誌』584、1889（明治 22）年 6 月 8 日
・「統計三家論を讀む」『東京医事新誌』593、1889（明治 22）年 8 月 10 日
・「答今井武夫君」『東京医事新誌』593、1889（明治 22）年 8 月 10 日
・「讀第三駁議。寄今井武夫君。用鴎外漁史韻」『東京医事新誌』603、1889（明治 22）年 10 月 19 日
・「「三タビ統計ニ就テ」ヲ讀ム」『東京医事新誌』604、1889（明治 22）年 10 月 26 日
・「統計ノ訳語ハ其定義ニ負カズ」『東京医事新誌』605、1889（明治 22）年 11 月 2 日、および 606、1889（明治 22）年 11 月 9 日
※上記「統計ニ就テノ分疏」の「第二、法と学」では「夫レ統計ハ理法ノ一区域ナリ」「統計ハ物的帰納ノ一理法ナリ」と述べ、「第六、因果ノ弁」では「今井君ハ統計ヲ以テ因果ヲ悟ルノ方便ナリト思ヒ玉フニヤ」と切り出し「(イ)、統計ハ以テ原因ヲ探求スベキ方法ニ非ズ」「(ロ)、統計ノ方法ニテ探求シタル法則ハ決シテ因果ト関係スルモノニ非ズ」と今井の論を切り捨てている。
参考文献：森林太郎『鴎外全集』第 28 巻、岩波書店、1974 年

今井武夫 は、共立統計学校卒業、明治 19 年東京府文書課勤務、25 年東京市本郷区役所書記、28 年台湾民政局、38 年台湾新報社社員。20 年から 25 年までスタチスチック社幹事、29 年まで報告委員。
今井の森に向けた著述は
・「統計に就て」『スタチスチック雑誌』37、1889（明治 22）年
・「再び統計に就て」『スタチスチック雑誌』39、1889（明治 22）年
・「三たび統計に就て」『スタチスチック雑誌』41、1889（明治 22）年など[2]
参考文献：日本統計協会創立 100 周年記念事業計画委員会『明治・大正期スタチスチック雑誌統計学雑誌論文選集』日本統計協会、1979 年

---

[2] 『スタチスチック雑誌』には統計学の方法論にかかわる主な論文がほかに、
・杉亨二「社会の事実は方法によらざれば知るべからず」『スタチスチック雑誌』43、1889（明治 22）年
・呉文聡「統計の話」『スタチスチック雑誌』79・80、1892（明治 25）年
・高野岩三郎「故杉亨二氏ト本邦ノ統計学」『スタチスチック雑誌』383、1918（大正 7）年
など、さらに経済統計に関する論文として、
・ハウスホーフェル述、呉文聡訳「経済生活のスタチスチック」『スタチスチック雑誌』31・42・46・47、1888（明治 21）年
・高野岩三郎「経済指数法に就て」『スタチスチック雑誌』326・327、1913（大正 2）年
・福田徳三「失業問題の数的考察」『スタチスチック雑誌』453・454、1924（大正 13）年
などがある。

『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』の完成に寄せて

大日方純夫

Ⅰ　「事典」という思想と実践

0　なぜ事典なのか
　事典とは何か―①語を集める＋②配列する＋③説明する
　事典という選択
　　『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』の「編集にあたって」

1　事典の編成
『慶應義塾史事典』
　事項項目＝時系列（通史）＋箇所・テーマ別
　人名項目＝５０音順
『福沢諭吉事典』―重層的・複合的編成
　読む―「Ⅰ　生涯」＝時系列（丹念な立項と的確な叙述）
　引く―「Ⅱ　人びと」＝５０音順（福沢人脈の人事データ）
　調べる―「Ⅲ　著作」＝年代順（便利な著作解題）
　読む―「Ⅳ　漢詩」「Ⅴ　ことば」（思想のエッセンスの抽出と巧みな解説）
　見る―「Ⅵ　表象」（図像としての福沢）
　データ―「Ⅶ　書簡宛名一覧」「Ⅷ　『時事新報』社説・漫言一覧」
　　「Ⅸ　年譜」「Ⅹ　基本文献」（至便）

2　『福沢諭吉事典』の出来栄え―福沢の威力と編者の実力
　至れり尽くせりの全福沢
　細部にまで行き渡るこだわり
　　立項の思想―何を項目として選ぶか
　　配列の論理―項目をどう並べるか
　　執筆の手筈―いかに項目を書くか

3　『福沢諭吉事典』の効果―福沢“万華鏡”からみる近代日本
　光源としての福沢（福沢からの光）―焦点としての福沢（福沢への光）
　　幕末・維新～自由民権～日清戦争～

4　利用する側の立場―項目の完結性と連続性
〈引く〉〈調べる〉＝項目としての完結性―まとまり
〈読む〉＝叙述としての連続性―流れ
〈知る〉＝発見―〈楽しむ〉
＊索引の機能

II　早稲田の場合の≪事典≫

1　早稲田大学百五十年史構想と事典の位置

『百年史』―新制時代の記述が薄い（とくに100周年に近い時期）

⇒150周年（2032年）に向けて全3巻の百五十年史を編纂（戦前までの歴史を概観し、新制大学以後150周年（2032年）までを編纂の中心に）

⇒まず、資料収集

写真集のほかに、資料集・事典（大学事典・人名事典）を追加することを検討

⇒≪大学事典≫の参照モデルとしての『慶應義塾史事典』

2　『福沢諭吉事典』と≪大隈重信事典≫

福沢諭吉（1835～1901）と大隈重信（1838～1922）の比較

①基本的な性格―思想家・教育者としての福沢：政治家としての大隈

②学校との関係―携わった福沢（先生）：“距離”をおいた大隈（老侯）

③政治との関係―距離をおいた福沢：担った大隈

④執筆状況―書く福沢：書かない大隈

⑤研究状況―　全集・伝記・研究 etc.汗牛充棟の福沢：僅少の大隈

3　≪大隈重信事典≫ならどうなるか

「Ⅰ　生涯」（幕末～新政府の官僚～下野と政党結成～外相・首相・政治家～教育・文明運動～日常と家庭）

「Ⅱ　人びと」（『大隈重信関係文書』）

「Ⅲ　著作」（単行本５０冊以上）

「Ⅴ　ことば」（演説・座談等）

「Ⅵ　表象」「Ⅸ　年譜」「Ⅹ　基本文献」

III　「辛口の注文」という注文に応えて

1　大隈重信との関係

『福沢諭吉事典』のなかの大隈

イギリス流議院内閣制

明治一四年の政変：政府広報紙発行問題、交詢社憲法案、政変

大隈条約改正案

⇒立憲改進党人脈（三田派）と福沢の位置

2　文明をどう問うか

3　アジアとどう向き合うか

朝鮮に対して

中国に対して